

「廃棄物管理」を軸に深化する国際協力キャリア

JICAのアソシエイト専門員は、国際協力の現場での実務経験を複数積んだ中堅人材が、JICA本部の様々な分野の開発課題の解決を担う部署などにおいて、効果的な国際協力をJICA内外関係者と共創し、牽引する経験を積むことが出来るポストです。2023年10月から新たに設けられました。今回、廃棄物管理分野でアソシエイト専門員を担われている大沼洋子さんに、ご自身のキャリアパスについて伺いました。



アソシエイト専門員
おおぬま 洋子
大沼洋子さん



これまでの
キャリアパス

大学
経済学部

1990年代、初の地球サミットが開催されたり、また京都議定書が採択されたりと、環境問題へ世界的に取り組んでいく時代の変遷期。経済学の中でも環境経済学が分野として新たに立ち上がってきた頃であり、環境問題を勉強してみたいと考える。
気候変動、大気汚染など、環境問題にも様々な分野があるが、たまたま家族が家電メーカーで廃棄物処理やリサイクルを扱う環境部門にいたことから、廃棄物管理に関する卒論を作成。

大学院
環境経済学

ゼミナールの教授がフランスとの学術交流を推進しており、毎年フランスの大学へ連れて行ってもらう機会があった。それが契機となり、自分で語学学校へ6年間通いながら、フランス留学前にフランス語の習得を目指す。

民間企業
日本

修士課程・博士課程を通じて、民間企業の環境対策における効果分析や国際比較といった研究を、インセンティブ構造に焦点を当てて行う。

JICA
特別嘱託
地球環境部

習得していたフランス語力も基に、フランスにある大学院で「交換研究員」として1年間留学。アフリカや中東からの移民なども多く、多様な社会の価値観や多様性、差別や格差といった様々な問題に触れる中、広い意味で「国際協力」に関心を抱く契機となる。

JICA
専門家
スリランカ
サモア

● 民間コンサルティング会社
廃棄物とリサイクルの制度構築に特化した事務所で10年ほど勤務し、日本の廃棄物管理へのコンサルティングに従事する。

● JICAを知ったきっかけ
民間コンサルティング会社からの転職活動中に、偶然PARTNER（JICAが運営する多様な国際キャリアの総合情報サイト）に行きつき、廃棄物管理分野でたまたま特別嘱託のポストを見つける。日本では廃棄物管理に関する将来的な市場が限られているが、開発途上国では、まさに廃棄物管理の仕組みを構築し更に拡大していこうという動きがあると知り応募に至る。

● 特別嘱託時代のエピソード
特別嘱託としてバングラデシュに出張し、初めて開発途上国の廃棄物管理現場に赴く。廃棄物処分場の1km先からも感じる、肌の毛穴にも染み込むような廃棄物の異臭に圧倒される。
その後も何度か出張に参加する中、開発途上国、特に廃棄物処分場の周辺における貧困や社会的弱者の実態を、各地で実際に見て知見を広げる。

専門家としてJICAプロジェクトが実施されている開発途上国の現場に派遣される。

● スリランカでのプロジェクト
廃棄物処分場の技術開発に特化して、現地で調達可能な資材を活用しながら汚染防止と修復技術の構築を行うプロジェクトの実施に携わる。

● サモアでのプロジェクト
大洋州島嶼国の全9か国における広域協力プロジェクト（J-PRISM2）の実施に携わる。人口も国土も小規模な島国では、食料・家電を含め、他国からの輸入品が多いが、それらを消費した後に適正に処分する場所や施設がなく、廃棄物が島の中で滞留してしまう傾向にあるため、廃棄物を国内から域外へ出していく必要があった。そのためプロジェクトでは「3R+リターン」というコンセプトを掲げ、プラスチックや廃油といった廃棄物を、適正に管理・分別を行ったうえで域外に出すための仕組みづくりを目指すパイロット事業を行った。

現在

「アソシエイト専門員」として、
JICA本部（地球環境部）での事業戦略策定や事業管理などに携わる

アソシエイト専門員としての現在

Q. 大沼さんはアソシエイト専門員として、どのような業務に携わられていますか。

A. 国際協力専門員と担当するプロジェクトを分担し、自分が受け持っているプロジェクトに関して、担当職員やJICA専門家等に対してプロジェクト管理に係る技術的なアドバイスを行っています。また、JICAの事業戦略（JICAグローバル・アジェンダ、*JICAクリーン・シティ・イニシアティブ等）を達成するための方針やデータ分析の方法策定に携わっています。

*JICAクリーン・シティ・イニシアティブ：廃棄物管理と水質汚濁・大気汚染防止等の環境対策の推進により、健全な環境を実現し途上国の人々の健康と生活環境の保全を実現できる持続可能な社会の構築に貢献することを掲げるJICAの事業戦略のこと

また、国際会議や学会、イベント等にも参加をし、JICAのプロジェクトについて对外発表をする機会もあります。例えば、JICAクリーン・シティ・イニシアティブのオンラインセミナーでファシリテーターをしたり、JICAプロジェクトで実施したプラスチックのリサイクルに関するパイロットプロジェクト結果について学会発表をしたりしています。

今後は、職員、ジュニア専門員や特別嘱託の方などに向けて、廃棄物・リサイクル分野で活躍されている方々を講師として招待したり、自分の経験について共有したりと、勉強会などの場を通じた人材育成にも携わっていきたいと思います。

Q. アソシエイト専門員のポストに就かれる中で、ご自身のキャリア形成の中で良かった点や、業務のやりがいなどを感じられる部分はありますか。

A. 国際協力専門員の方々の仕事ぶりを身近に見られることは、アソシエイト専門員としての役得だと思います。例えば、自分より国際協力経験もプロジェクト運営、組織マネジメント経験も遥かに長い国際協力専門員の方に私のメンターとなっていただき、事業に係る業務の進め方について、気兼ねなく相談させていただくことが出来ています。

また、アソシエイト専門員という中堅人材として、同じ部署におけるJICAの職員やスタッフとも近い目線を持ってプロジェクトを担当できているのではないかと感じています。

加えて、JICAの特別嘱託やプロジェクト専門家の経験も基に、本部、在外事務所・支所、そしてプロジェクト現場などを俯瞰しながら、各拠点における特色や役割、期待したい事などについて自分の考えをまとめることが出来てきました。その状態を生かして、自分が専門家だった頃に本部や国際協力専門員へ求めていた事などを、アソシエイト専門員として少しずつ進めていけたらなと思います。

業務の中で感じるやりがいは、私が以前専門家として担当していた国のプロジェクトに、アソシエイト専門員という立場から改めて関わることです。プロジェクトの現場にも出張し、プロジェクトの進度をフォローアップすることができています。

Q. 大沼さんがアソシエイト専門員として、必要とされていると感じる資質や能力、経験などがありましたら教えてください。

A. やはり「分野の専門性」でしょうか。私が専門としている「廃棄物管理」領域の中にも、「土木系」「政策立案系」など更に細分化された専門分野がありますが、その分野の中での専門性の軸を持っている事が重要ではないかと思います。

また、色々な開発途上国における廃棄物管理の事例を知っていて、それらに「横串を刺して比較し課題を発見する力」も大事ですね。例えば、地域の特性や経済発展のレベル、人口規模の違いなどを基に各国の仮説設定を行い、仮説と実際の現場でのギャップも観察しながら、現状分析や課題解決をすることが求められます。これらの点は、JICAの特別嘱託や専門家、アソシエイト専門員としての経験を通じて、開発途上国の現場経験を踏んだことで培っている途中と考えています。

更に、開発途上国の事例だけでなく、先進国の環境政策の潮流やその中で日本が置かれている立場、日本が持つ技術などについても情報をアップデートしていくことが大切ですね。私は以前、日本国内で廃棄物管理に関わるコンサルティングに従事していたため、その頃の繋がりを生かして、当時の仕事仲間と情報交換や課題解決アプローチについて相談する機会も設けるようにしています。

Q. アソシエイト専門員のポストに就かれて、新たに経験されている事や学ばれている事はありますか。

A. これまで「リーダー」という立場から多くの人員を抱えてプロジェクトをマネジメントした経験はあまり無かったので、一緒にプロジェクト管理へ取り組むチームのひとりひとりの個性や特色、関係性にも目を配りながら、マネジメント経験を強化していきたいと思っています。

また、私は「国際協力とは何か、過去どのような経緯があって今の援助の形に変遷してきたのか」といった内容について、深く学んできた経緯がありませんでした。アソシエイト専門員になって、JICAの次長や上級審議役などともお話する機会が増えたことで、国際協力の変遷や潮流などについても助言いただけるようになり、ODAの歴史や教訓についても更に理解を深化させていきたいと思っています。



写真①：JICA専門家としてサモアに派遣され、大洋州島嶼国の全9か国における広域協力プロジェクト（J-PRISM2）実施に携わっていた際の様子



Q. 大沼さんが「廃棄物管理」という専門性を基にキャリアを歩まれる中で、目指されている「社会像」や、持たれている課題認識などがありますか。

A. 目指すは「地球と共生して未来をつくる社会」

地球環境問題への対策は喫緊の課題でありながら、国際社会全体および各国政府や民間企業などの間で、スピード感のある効果的な対策がなかなか進んでいない現状にあると思います。

JICAの中では、部署間、また地球環境部の中でも各課題分野のグループごとに縦割りになりやすい部分があるため、セクターを跨いだ横の繋がりや連携をより柔軟にすることが、喫緊の課題である環境問題に対して大きなインパクトを創出するために重要だと考えています。エネルギー、自然災害、気候変動など、様々な分野に渡る課題へ「てこの原理」のように一挙にリーチできる可能性を探っていききたいと思います。

今後見据えている

キャリアの歩み

Q. 大沼さんはアソシエイト専門員としてのご経験を基に、今後どのようなキャリアを歩んでいこうと考えられていますか。

A. 私は今後、JICAの国際協力専門員になることを一つの目標としています。しかし、その他にも様々な選択肢を持ってキャリアを歩んでいきたいと考えており、「廃棄物管理」のスペシャリストとして専門性の軸を更に深化していきたいです。

これまではアジアや大洋州といった地域でのプロジェクトを担当することが多かったのですが、今後は中南米・カリブ地域やアフリカ地域など様々な現場を訪れ、開発途上国における廃棄物管理とそれに対する国際協力の在り方についての視野を広げていきたいと思っています。

また、キャリアを積んでいく中で、周囲からの指摘や批判が減ったり、自分自身の認識も甘くなっていったりする事があるかもしれません。そのため、「知ったかぶり」をするのではなく、自分の発言に責任を持ち、現場を実際に見て更に知識や経験を積んでいけるような自己研鑽を今後も続けていこうと思っています。



「開発協力人材」を目指す方へ

メッセージ



「専門にしたいと思い立ったら、その日から“専門家”」

私はこれまで、メーカーの環境部門や民間の廃棄物処理企業などを顧客にして、日本における廃棄物管理コンサルティング業界で長年勉強や仕事をしてきました。そのような日本での限られた経験を、開発途上国の文脈でもそのまま生かすことができる場合が多くありました。また、廃棄物管理は幅広い分野の専門家で構成されており、土木、IT、法制度、財務、住民啓発など、多様なバックグラウンドを持つ人材が働いている現状があります。

そのため、これまで国際協力に携わったことがなくても、専門にしたいと思い立ったら「その日から“専門家”」として、開発途上国での廃棄物管理支援へ臆することなく関わっていただきたいです！廃棄物管理は、人間が生きている限り続いていく必要な環境対策の一つであり続けると思います。



写真②：JICA専門家としてスリランカに派遣され、廃棄物処分場の技術開発プロジェクトの実施に携わっていた際の様子

編集後記

大学生の私にとっては全く耳馴染みのなかった「アソシエイト専門員」。2023年10月から新たに設けられたJICAの職制ということで、JICAで勤務されているスタッフや関係者の皆さまにとっても、実際のポストに就かれている大沼洋子さんの視点からアソシエイト専門員の仕事や役割について知って頂ける機会になりましたら幸いです。特に大沼さんは、長年日本で廃棄物管理に関わられてきたご経験をもとに、JICAが運営しているキャリア情報サイト（PARTNER）を通じて偶然JICAの「特別嘱託」ポストを発見され、それを皮切りに国際協力業界へ参入されました。このインタビューを通じて、国際協力とは一見関係ないように思える業界や分野からでも、人生のどこかで思い立った時に「専門性」や「技術力」、「実務経験」などを生かして、開発途上国との協力へ貢献して頂ける大きな可能性を見出すことができました。大沼さんのように、新たに国際協力業界へ参入しようと挑戦され、専門性を軸に更なるキャリアを歩んでいかれる方にとって、本インタビューの内容が少しでも役に立ちましたら大変嬉しく思います。改めて、インタビューを受けてくださった大沼洋子さんには、心から感謝を申し上げます。